

平成27年度

平和大使長崎派遣事業報告書

守り続けよう 平和な未来

伝えていこう 過去の悲しみ



松 戸 市

目 次

平和大使長崎派遣事業にあたって	1
世界平和都市宣言	2
平和大使長崎派遣募集	3
平和大使名簿	5
平和大使長崎派遣行程	7
平和大使長崎派遣帰庁報告会	17
戦後70周年・世界平和都市宣言30周年記念 平和大使長崎派遣報告会	18
平和大使の報告	19
「長崎に行って感じたこと」	服部 叶汰 20
「核と世界」	瀬谷 恭平 22
「平和大使を終えて」	長谷川 勇矢 24
「私が伝えていくべきこと」	朝生 蘭 26
「経験」	田島 歩夢 28
「伝え続けるということ」	佐藤 駿太 30
「残すべきもの」	小林 優人 32
「二十四万通りの被爆体験」	山下 優月 33
「長崎で感じたこと」	田崎 和 35
「ナガサキ ～平和大使長崎派遣報告書～」	須藤 巧 37
「長崎で戦争と平和について学ぶ」	萩原 真央 40
「平和を大切に作る世界へ」	大久保 敦康 42
「心の壁を破る」	倉重 はるか 44
「松戸市平和大使長崎派遣事業報告書」	清水 智也 46
「平和大使長崎派遣に参加して」	木村 史来 48
「私が伝えていきたいこと」	吉田 真帆 50
「平和の尊さ」	飯銅 千尋 52
「長崎に行って感じたこと」	井上 未来 54
「平和をつなぐ」	島岡 里帆 56
「第8回平和大使として」	藤井 友紀 58
「長崎で学んだこと」	山田 佳那 60
「平和大使長崎派遣で学んだこと」	福島 有香 63

新聞掲載記事	・・・・・・・・・・・・・・・・	65
長崎平和宣言（平成27年8月9日）	・・・・・・・・	66
歴代平和大使名簿	・・・・・・・・・・・・・・・・	74



～ 平和大使長崎派遣事業にあたって ～

今年は終戦から70周年、松戸市が昭和60年3月に世界平和都市を宣言してから30周年という大きな節目の年を迎えました。

本市は、世界平和都市宣言を行って以来、毎年様々な平和事業を展開しており、その一つとして「平和大使長崎派遣事業」を実施しております。この事業は21世紀を担う市内中学生を原爆投下の地である長崎市に「平和大使」として派遣するもので、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを学び、戦争や核兵器の無い平和な未来を築こうという心を育てていただくことを目的としております。平成20年度に始めた本事業は今年で第8回目を数え、これまでに154名を平和大使に任命しました。

さて、今年の8月9日、長崎市平和公園において「被爆70周年 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」が開催され、22名の平和大使が参列しました。

式典には約6,700人、過去最多の75か国から集まった代表らが参列し、原爆犠牲者の冥福を祈り黙とうを捧げました。このことから、核兵器廃絶を求める声が世界的な流れになりつつあることが感じられます。

そして、長崎市長は式典の「長崎平和宣言」の中で、日本政府に、国の安全保障は核抑止力に頼らない方法を検討するよう訴えるとともに、国の安全保障のあり方を決める法案に対して慎重で真摯な審議を行うよう求めました。

被爆者の平均年齢は今年で80歳を超え、ますます被爆体験や戦争体験の記憶が風化することが危惧されます。悲惨な記憶を決して忘れないために、そして戦争や核兵器の無い平和な未来を実現していくために、私たちは、直接体験談を聞くことができる最後の世代として真実をしっかりと引き継ぎ、若い世代に継承するということが使命であると考えております。

併せて、世界平和都市宣言における、世界の恒久平和の達成を念願するという理念から、世界各地で続く紛争に対しても目を向け、様々な角度から、広い視野を持った施策を行う必要があると認識しているところです。

本事業を通して、平和大使が長崎の地で学び感じた被爆の実相や平和の尊さを周りの人に伝え、一步ずつでも平和な世界、平和な未来に近づくことを願い、今後も本事業を実施してまいりたいと考えております。

～ 世界平和都市宣言 ～

我が国は、世界で唯一の被爆国である。

何人も平和を愛し、平和への努力を続け、常に平和に暮らせるよう均しく希求しているところである。

しかし、現下の国際情勢は、緊張化の方向に進み市民に不安感を与えている。

かかる状況に鑑み、松戸市は日本国憲法の基本理念である平和精神にのっとり、平和の維持に努め、併せて非核三原則を遵守し、あらゆる核兵器の廃絶と世界の恒久平和の達成を念願し、世界平和都市をここに宣言する。

昭和60年3月4日 松戸市

• World Peace City Declaration

[英語]

March 4, 1985

In the past, our country has experienced the sadness from an Atom Bomb explosion.

This makes our nation determined that history will not be repeated.

All of us yearn for peace, continue making an effort to create peace, and wish that we all can live in a peaceful environment in the future.

However, presently around the world, international affairs are becoming increasingly tense and cause our citizens great concern.

In response to the present turmoil across the world, Matsudo City now more than ever, willfully observe the peaceful spirit that is the fundamental philosophy of the Japanese Constitution.

We will endeavor to maintain nationwide peace, comply with the three anti-nuclear principles and possess the desire to abolish all nuclear weapons and the accomplishment of permanent peace throughout the world.

Therefore, we now declare our city as the "World Peace City".

City of Matsudo

• 世界平和都市宣言

[中国語]

日本是世界唯一的核弹受难国。

我们热爱和平、为和平而奋斗、切望一个和平的生活环境。

但是、当今国际关系仍然紧张、市民深感忧虑。面对动荡的世界、松戸市郑重宣告本市将遵循日本国宪法基本理念、

高扬和平精神、为保障和平而尽力、坚持非核三原则、为在地球上废除所有核武器、

建立一个永久和平的世界而积极贡献力量。

～ 平和大使長崎派遣募集 ～

世界平和都市宣言事業 第8回「平和大使長崎派遣」大使募集

<募集要項>



松戸市では、戦争や核兵器の無い平和な未来を築こうという心を育んでもらうため、長崎市で開催される「青少年ピースフォーラム」へ参加する中学生を募集します。

【 平和大使とは 】

・「平和大使」とは、松戸市の世界平和都市宣言により、戦争や核兵器の悲惨さ、平和の尊さについて事前研修、派遣、事後報告会を通じて知識を深め、そこで学んだことや感じたことを周りの人に語り伝えていくことが期待される人です。

【 対象 】

・市内中学校に在学する生徒で、戦争や核兵器の悲惨さ、平和の尊さについて学ぶ意欲があり、裏面の日程にある**事前研修、派遣、事後報告会に全て参加できる人**を対象とします。
※既に平和大使に任命された方は、対象となりません。

【 定員 】

・ 22名（応募者多数の場合は、抽選とします。）

引率：松戸市役所 職員3名 ・ 添乗員1名

【 費用 】

- ・市の負担 長崎への往復航空運賃、宿泊代、長崎での移動バス電車運賃、
8/7の夕食、8/8、8/9の3食、8/10の朝食、昼食。
- ・自己負担 事前研修、事後報告会の会場（市内）までの交通費、8/7の昼食など。

【 申込方法 】

・参加申込用紙に必要事項を記入して、任意の封筒に入れ学校に提出してください。

【 提出期限 】

・平成27年5月22日（金）

【 研修日程 】

1 事前研修

平和についてのオリエンテーションを行います。(自主学習)

- 7月 5日 (日) 9:00～12:00 結団式及び第1回オリエンテーション
青少年ピースフォーラム等の内容説明。
- 7月26日 (日) 10:00～16:00 第2回オリエンテーション
平和記念事業「平和劇」を鑑賞します。
- 8月 1日 (土) 10:00～12:00 第3回オリエンテーション
自主学習とスケジュールの確認。

2 派遣研修

(1) 場所 : 長崎市

(2) 期間 : 8月7日(金)～8月10日(月) 3泊4日

(3) 内容 : 青少年ピースフォーラムへの参加等

〈青少年ピースフォーラム〉

8月9日の平和祈念式典にあわせて、全国の自治体が派遣する青少年と長崎市の青少年とが一緒に被爆の実相や平和の尊さを学習し、交流を深めることで平和意識の高揚を図ることを目的として長崎市が実施しています。主な内容として、平和祈念式典への参列、被爆体験講話、平和関連施設見学、平和学習会への参加を予定しております。

(4) 「平和大使長崎派遣」日程表

8/7(金)	松戸駅 → 羽田空港 → 長崎空港 → 長崎市内ホテル (自主学習)	
8/8(土)	午前	平和案内人のガイドによる被爆建造物見学 〈場所:原爆落下中心地公園、城山小学校など〉
	14:00～15:00	開会行事(被爆体験講話など) 〈場所:平和会館ホール〉
	15:10～17:00	参加型平和学習(屋内) 〈場所:平和会館ホール〉→原爆資料館見学
8/9(日)	午前	平和祈念式典への参列 〈場所:平和公園〉
	13:30～15:30	参加型平和学習(屋内) 〈場所:平和会館ホール〉
8/10(月)	ホテル→ 長崎空港→ 羽田空港→ 市役所帰庁→ 帰庁報告会→市役所解散	

3 事後報告会

8月28日(金) 平和大使長崎派遣報告書(作文)の提出

※提出期限 派遣研修で学んだ成果を生かし、戦争や核兵器の悲惨さや平和の大切さを伝えるため、平和大使長崎派遣報告書を作成します。

11月3日(火) 松戸市平和事業「平和の集い」にて、長崎派遣で学んだこと感じたことを市民の皆様に伝えます。

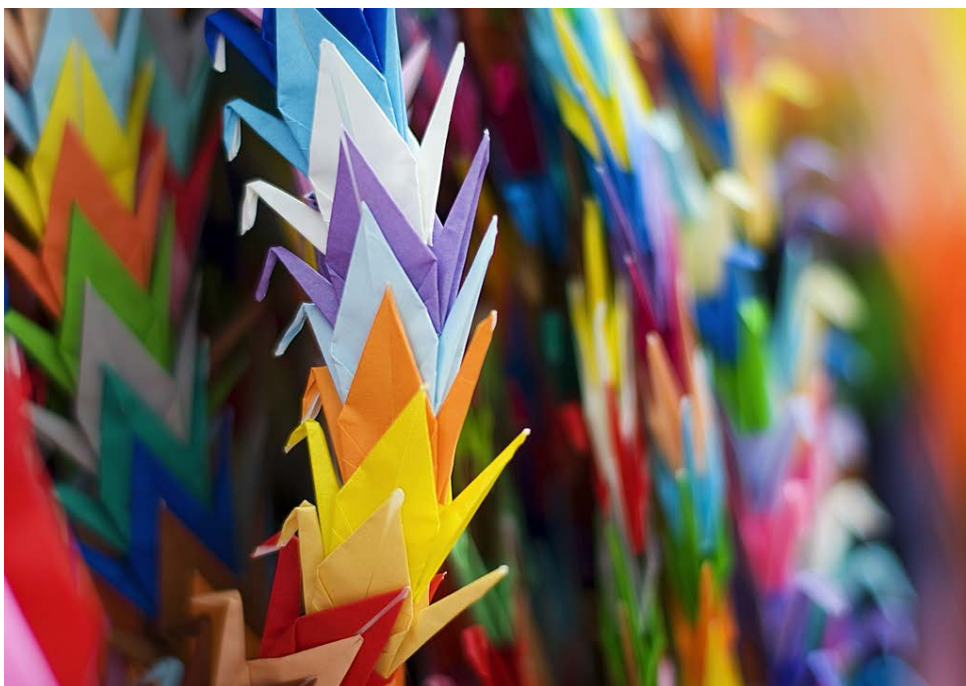
～ 平和大使名簿 ～

はっとり 服部	かなた 叶汰	(第一中学校	1 学年)
せや 瀬谷	きょうへい 恭平	(第二中学校	2 学年)
はせがわ 長谷川	いさや 勇矢	(第三中学校	2 学年)
あそ 朝生	らん 蘭	(第四中学校	1 学年)
たしま 田島	あゆむ 歩夢	(第四中学校	3 学年)
さとう 佐藤	しゅんた 駿太	(第五中学校	1 学年)
こばやし 小林	ゆうと 優人	(第六中学校	2 学年)
やました 山下	ゆつき 優月	(第六中学校	2 学年)
たざき 田崎	あまね 和	(常盤平中学校	1 学年)
すとう 須藤	たくみ 巧	(小金南中学校	1 学年)
はぎはら 萩原	まお 真央	(小金南中学校	1 学年)
おおくほ 大久保	のぶやす 敦康	(古ヶ崎中学校	1 学年)
くらしげ 倉重	はるか はるか	(古ヶ崎中学校	2 学年)
しみず 清水	ともや 智也	(牧野原中学校	2 学年)
きむら 木村	ひとき 史来	(牧野原中学校	1 学年)
よしだ 吉田	まほ 真帆	(河原塚中学校	1 学年)
はんだう 飯銅	ちひろ 千尋	(和名ヶ谷中学校	2 学年)
いのうえ 井上	みく 未来	(旭町中学校	2 学年)
しまおか 島岡	りほ 里帆	(小金北中学校	1 学年)

ふじい ゆき
藤井 友紀 (聖徳大学附属女子中学校 2学年)

やまだ かな
山田 佳那 (聖徳大学附属女子中学校 2学年)

ふくしま ゆうか
福島 有香 (専修大学松戸中学校 3学年)



～ 平和大使長崎派遣行程 ～

7月5日（日）

◆結団式・第1回オリエンテーション (市役所議会棟3階特別委員会室・ 第二会議室にて)

結団式では各学校から選ばれた平和大使
22名に市長から任命証が交付され、それ
ぞれ大使としての抱負を発表しました。

オリエンテーションでは自己紹介をする
とともに事業の目的や大使の役割を確認し
青少年ピースフォーラムの説明を受けました。



〈任命証交付〉



〈平和大使長崎派遣結団式〉



〈オリエンテーション〉

7月26日（日）

◆第2回オリエンテーション（松戸市民会館にて）

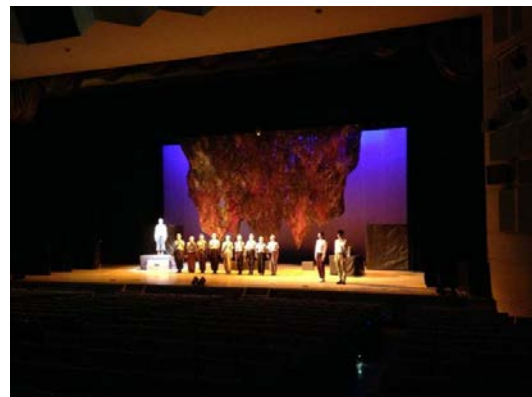
長崎派遣に向けて、リーダー・サブリーダーや派遣中のルールなどの必要事項を話し合っ
て決め、コミュニケーションを図りました。その後、松戸市の戦後70周年・世界平和都市
宣言30周年記念事業として開催された平和展（伊勢丹新館9階アートスポットまつどにて）
と平和劇（松戸市民会館ホールにて）を見学、鑑賞しました。



〈リーダーを中心に必要事項決定〉



〈平和展〉



〈平和劇〉

8月1日（土）

◆第3回オリエンテーション（市役所別館地下1階研修室にて）

長崎派遣のスケジュールと注意事項を確認した後、広島・長崎での被爆体験談をDVDで
視聴しました。そして原爆資料館に献呈する千羽鶴を作るため、各自が折った折り鶴と市民
の方々折ってくれた鶴を糸でつないでいきました。千羽鶴の由来である佐々木貞子さん
のお話を踏まえた上で、平和への願いを込めて行いました。



〈被爆体験談視聴〉



〈千羽鶴作成〉

8月7日（金）

◆9：19 長崎へ出発

9時00分松戸駅に集合し、出発式を行い、家族や関係者に見送られて松戸駅を出発しました。13時00分羽田空港発のソラシドエア35便に搭乗し、14時50分長崎空港に到着、バスで長崎市内の宿泊ホテルへ向かい、16時10分頃ホテルに到着しました。



〈出発式〉



〈羽田空港出発ロビー〉

◆16：40 自主学習（日本二十六聖人殉教地（西坂公園）見学）

ホテル到着後、徒歩で行きました。ここは小高い丘にあり、1597年、キリシタン禁令により26人の宣教師と信徒が処刑された場所です。今は長崎県の史跡に指定され、カトリック教徒の公式巡礼地となっています。見学を通して長崎の歴史と文化に触れました。



〈日本二十六聖人殉教地（西坂公園）〉



◆19：00 千羽鶴作成（ホテル会議室にて）

原爆資料館へ献呈するため、大使が作成した折り鶴と市民の方々からいただいた折り鶴で千羽鶴を完成させました。また、平和への思いを込めた千羽鶴に添える標語を大使皆で考え「守り続けよう 平和な未来 伝えていこう 過去の悲しみ」に決めました。



〈千羽鶴完成〉



〈標語決定〉

8月8日（土）

◆9:00 自主学習（被爆建造物見学）

朝7時55分にホテルを出発し、路面電車に乗り、被爆建造物見学へ向かいました。

見学は2班体制で、それぞれボランティアの平和案内人によるガイドのもと、平和公園、城山小学校、原爆落下中心地を約2時間かけて歩いて巡りました。被爆体験者でもあるガイドの方が、当時の悲惨な様子を交えながらわかりやすく説明してくれました。熱心に説明を聞きながら貴重な被爆建造物を見学し、当時の状況を学びました。

※ 城山小学校内に保存されている被爆校舎は、平成25年8月1日、国の文化財に登録されました。



〈松山町防空壕群（平和公園内）〉



〈平和祈念像（平和公園内）〉



〈少年平和像（城山小学校内）〉



〈被爆校舎（城山小学校平和祈念館）〉



〈被爆当時の地層（原爆落下中心地近く）〉



〈原爆落下中心地碑・浦上天主堂遺壁〉

◆13:00 千羽鶴献呈 (原爆資料館にて)

午後は前日大使が完成させた千羽鶴と、市民の方々からいただいた千羽鶴を原爆資料館に献呈しました。



〈原爆資料館エントランスロビー〉



〈松戸市の千羽鶴〉



〈千羽鶴献呈〉

◆13:30 青少年ピースフォーラム（開会行事）参加
（長崎市平和会館にて）

青少年ピースフォーラムには、全国から多くの小・中・高校生が参加しました。開会行事では、地元高校生や大学生の青少年ピースボランティアによる開会宣言、長崎市長挨拶の後、中村一俊さんによる被爆体験講話を聞きました。



〈長崎市長挨拶〉



〈被爆体験講話〉

◆15:10 青少年ピースフォーラム（平和学習）参加
（長崎市平和会館にて）

続いて青少年ピースボランティアの進行による平和学習に移りました。参加者全員がグループ毎に分かれて、自己紹介とレクリエーションで緊張をほぐした後、スライドと紙芝居で被爆の実相を学びました。その後、原爆資料館周辺を巡るフィールドワークに参加し、1日目の青少年ピースフォーラムが終了しました。



〈自己紹介・レクリエーション〉



〈スライド〉



〈紙芝居〉



〈フィールドワーク〉

◆17:15 自主学習（原爆資料館見学）

その後、原爆資料館を見学しました。資料館には原子爆弾の実物大模型や、原爆の被害を受けた物品、被爆された方の写真など、資料がたくさん展示されており、被害の悲惨さを目の当たりにしました。



〈原子爆弾「ファットマン」の実物大模型〉



〈原爆の被害を受けた物品など〉



◆19:00 夕食及びミーティング（ホテルにて）

ホテルに戻り夕食をとった後、ミーティングを行いました。様々な平和学習に参加した今日一日を振り返り、各自が印象に残ったことや学んだことを述べるとともに、改めて派遣の目的と大使の役割を確認し、明日の平和祈念式典参列に向けて心構えをしました。



〈夕食〉



〈ミーティング〉

8月9日（日）

◆10:35 平和祈念式典参列（平和公園にて）

いよいよ「被爆70周年 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」参列の日を迎えました。

朝8時10分にホテルを出発し、平和公園に到着、大使たちは緊張した面持ちで会場に入りました。

厳粛な空気の中、式典が行われ、原爆投下時刻の午前11時2分、サイレンと長崎の鐘が鳴り響きました。原爆犠牲者のご冥福と世界の恒久平和を祈り、黙とうを捧げました。

被爆70周年
長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

式次第

- 10時35分 被爆者合唱
- 10時40分 開式
原爆死没者名奉安
- 42分 式辞（長崎市議会議長）
- 46分 献水
- 48分 献花
- 11時02分 黙とう
- 03分 長崎平和宣言（長崎市長）
- 13分 平和への誓い
- 18分 児童合唱
- 23分 来賓挨拶
- 38分 合唱 千羽鶴
- 43分 閉式



〈式典会場〉



〈平和祈念像〉



〈開式前の様子〉



〈黙とう〉

◆13:30 青少年ピースフォーラム（平和学習）参加
 （長崎市平和会館にて）

午後は前日に引き続き、青少年ピースフォーラムに参加しました。再びグループとなり、前日の平和学習を踏まえて「世界を平和にするためにはどうすればよいか」などのテーマについて意見交換をしました。大使たちは班の代表として発表するなど、積極的に取り組みました。グループワークを通じて全国から集まった同年代の参加者と交流ができ、貴重な体験となりました。2日間を締めくくる修了証書授与では、松戸市が代表して壇上で修了証書をいただくことができました。



〈意見交換〉



〈発表〉



〈代表者へ修了証書授与〉



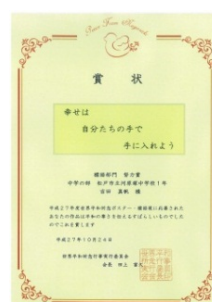
〈参加者集合写真〉

世界平和祈念行事実行委員会（事務局：長崎市被爆継承課）が開催した「平成27年度世界平和祈念ポスター・標語展」への応募者のうち、嬉しいことに3名の大使が、標語部門・中学の部で、努力賞を受賞しました。3名には会長である長崎市長から賞状が送られました。その大使と標語を紹介します。

第二中学校 2年 瀬谷 恭平 「語り継ごう、戦争と核のおそろしさ 伝えよう、平和の尊さ」

古ヶ崎中学校 2年 倉重 はるか 「つくり続けよう、平和な未来 持ち続けよう 平和な心」

河原塚中学校 1年 吉田 真帆 「幸せは 自分たちの手で 手に入れよう」



〈賞状 左から、瀬谷、倉重、吉田〉

◆16:50 自由学習（大浦天主堂、グラバー園見学）

青少年ピースフォーラムを終え、自由学習に向かいました。大浦天主堂を見学し、長崎の歴史と文化に触れました。

夕食後はグラバー園を散策しました。そこから見た長崎の夜景は美しく、大使たちの良い思い出となりました。



〈大浦天主堂〉



〈グラバー園〉

8月10日（月）

◆8:00 松戸へ出発

4日間お世話になったホテルの方にあいさつし、バスで長崎空港へ向かいました。

10時50分長崎空港発の全日空664便に搭乗し、長崎を後にしました。飛行機の中では帰庁報告会に向けて準備をしました。

12時35分羽田空港到着。市の迎いのバスで、市役所へ向かいました。



〈長崎空港出発ロビー〉

◆14:30 松戸市役所到着

スムーズに松戸市役所に到着。皆、元気で帰ってくることができました。

帰庁報告会が始まる前に、大使一人一人に青少年ピースフォーラムの修了証書が渡されました。



〈修了証書授与〉

～ 平和大使長崎派遣帰庁報告会 ～

◆15：00 帰庁報告会（市役所議会棟3階特別委員会室にて）

副市長をはじめ、出迎えてくれた家族に、長崎で見て、聞いて、体験したこと、また派遣を通して新たに感じた平和への思いなどを一人一人報告し、4日間の派遣日程を終えました。



〈帰庁報告、副市長の言葉〉



〈青少年ピースフォーラム修了証書を手に集合写真〉

～ 戦後70周年・世界平和都市宣言30周年記念 平和大使長崎派遣報告会 ～

11月3日（火・祝）

◆13:00 平和大使長崎派遣報告会（松戸市民劇場にて）

松戸市の平和事業「平和の集い」の中で開催しました。大使の役割を果たすべく、長崎派遣を通して学んだことや感じたことを、市民の皆様へ報告しました。

大使たちが、スクリーンに映し出した写真などに合わせて、事業の目的や大使の役割、結団式から長崎派遣、そして帰庁報告会までの流れを紹介するとともに、場面毎に学んだことや感じたことを述べる形で行いました。



私たち平和大使は、戦争犠牲者や被爆者の思いを無駄にしないために、そして平和な未来を実現していくために、たくさんの人に戦争の悲惨さや核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを伝え、広めていきます。

平和大使の報告



『長崎に行って感じたこと』

第一中学校 1年 服部 叶汰

70年前、忘れてはいけない出来事が起こりました。それは、長崎と広島に原爆が落とされたことです。

原爆から逃げ切れた人、逃げ切れなかった人。それぞれが、命を奪われ、心に傷を負いました。

僕は、8月7日から10日まで3泊4日で平和大使として長崎に行ってきました。原爆資料館や城山小学校を見学し、そして8月9日には平和祈念式典へ参列しました。多くを学び考えた四日間でした。

その中で特に印象に残ったことが三つあります。

まず一つ目は、原爆資料館で見た当時の写真や壊された物などです。亡くなった方や熱線で焼けて皮膚が垂れ下がった方など、原爆の恐ろしさや戦争の怖さを感じました。11時2分で止まった時計を見た時はとても悲しい気持ちになりました。そして二度とこんな悲惨なことは起きてはいけないと思いました。

二つ目は、城山小学校に行ったことです。城山小学校は爆心地から約500メートルのところにあります。一つの棟だけは当時のまま残しており、他の棟は新しく造りかえられ、今でも生徒が通っているそうです。残された棟は真っ黒にこげ、熱線でとけた壁からは、釘が浮き出ていました。とても被害が大きく、当時約1,500人いた生徒は、100人程しか生き残れなかったそうです。今僕たちは安全に学校に通えるけど、当時の人は死と隣り合わせで学校に通っていたのだと思うと今の幸せに感謝しないといけないと思いました。

三つ目は、被爆経験者の中村さんの話です。熱心に話をしてくれた姿からは、「戦

争は絶対にダメだ」ということを、後世に伝えていかなければいけないという強い思いが伝わってきました。当時、倒れて身動きがとれない人に水を求められたが、水を汲んであげられなかったことを今でも悔やんでいるそうです。そして家族や知り合いがいなくなってしまう生きる思いがなくなったそうです。生き残った人たちも、つらい思いをずっとかかえて生きているのだなと思いました。

原爆とは、人の命、心、生きがいを奪ってしまう最悪な武器だということが分かりました。いまだに地球上には約15,700発もの核兵器があります。これがすべて落とされたらと思うととても怖くなります。

中村さんが僕たちに伝えてくださったように、僕もこの長崎で見て聞いて感じたことをたくさんの人たちに伝えて、みんなの力で核兵器の無い世の中を作っていきたいです。

最後に長崎派遣の準備やつきそいをしてくださった皆様、本当にありがとうございました。

『核と世界』

第二中学校 2年 瀬谷 恭平

僕は戦争の悲惨さや核兵器の恐ろしさを学びたいと思い、平和大使長崎派遣に参加しました。

長崎では、被爆建造物を見学したり、平和祈念式典に参加したりしました。式典では、被爆者の方やその遺族の方々が参列しており実際に体験されたことやつらく悲しい現実を聞きました。70年たった今でも原爆の後遺症によって苦しみ続けていること、平和な世の中というにはまだまだ遠いということを知りました。

様々な話を聞いた中で印象に残ったことがあります。それは、「15, 700」という数字です。この数字が意味することは、全世界に今も存在する核兵器の数です。その中でもすぐに核兵器を発射できる設備を持つ国もあります。もしもこの爆弾が使用されてしまうと、長崎や広島のように悲惨な過去を繰り返してしまいます。絶対に同じ過ちを繰り返してはいけないと強く思いました。

核兵器を使用してしまうと、地球はとても生命が暮らしていける環境ではなくなると思います。原子爆弾から大量に放出された放射線は、人体や植物などにも影響を与え健全に暮らしていけなくなってしまうでしょう。絶対に戦争をしてはならない。絶対に核兵器を使用してはならないと強く思いました。

今現在、戦争をしている国が多くあり決して平和な世の中とは言えません。平和な未来を作るために自分にできることを考えてみました。

一つ目は、過去に起こった戦争についてもっと調べたり学んだりするという事。

二つ目は、自分が知り得た情報をたくさんの人に伝え、一人でも多くの人に平和について語り継いでいくということです。

同じ悲劇を起こさせないよう微力ながら努力していくことを約束します。

『平和大使を終えて』

第三中学校 2年 長谷川 勇矢

僕は、今回長崎に行かせていただいて、とても心に残ったことが二つあります。

一つは、被爆者の方の話です。そこで一つの被爆体験を紹介しようと思います。

その人は、中村一俊さんといいます。中村さんは当時、お母さんとお米を取りに爆心地から1.5キロぐらいの所にいましたが、お母さんは原爆の落ちてくる前に家に帰りました。そして少しの時間がたった頃、原爆は落とされました。中村さんは、火傷を負いながらも急いで家に帰ろうとすると、地面に倒れている一人の少年に会いました。「水を取って来て。」と言われましたが、「家族を見つけてから。」と約束し、急いで家に帰りました。すると、あたり一面に倒れて亡くなっている人や、川で水を求めて亡くなっている人がたくさんいましたが、中村さんは奇跡的にお父さんに会うことができました。けれど、お母さんや、他の家族はみんな死んでしまったのです。そして、その後、約束をした少年の所に戻りましたが、すでに亡くなっていたそうです。ぼくが思うに、中村さんはこの時、すさまじい絶望感があったのではないかと思います。もし、僕が同じ体験をしていたら、恐怖と悲しみの感情でいっぱいになり、少年との約束を守れないし、生きていく希望を失くしてしまうと思います。

けれども中村さんは、家族を失った大きな悲しみや、約束を果たせなかった後悔に加え、放射線による後遺症の苦しみもあるのに、必死で生き抜き、今、僕たちに「核兵器はダメ」と言える人になって欲しいと願い、語ってくれています。その姿にとても心を打たれました。そして僕も周りの人々に核兵器の恐ろしさを伝えようと固く決意しました。

そして、話の後、「平和とは？」という質問に対して「まず一人一人が近くにいる人たちと仲良くなり、それを学校、地域、町、国というように広げて、最終的には世界中の人が仲良くなること。」と、中村さんは答えていました。僕は、本当にその通りだと思いました。世界中の人と仲良くすれば核兵器のような恐ろしい武器などを全てなくせると思うからです。だから僕は、これからも、もっと多くの人と仲良くできるように頑張りたいです。

そして心に残ったもう一つの話は、原爆資料館で見た物のことです。そこでは、当時の写真や実際の服などの資料がたくさんあり、さらに詳しく知ることができました。例えば、ガラスビンがグニャグニャに変形し、周りの物とくっついていたり、服はガラスが刺さって破れ、黒く焼け焦げていました。鉄でできた橋名板は真っ黒に変わって曲がっていました。木は、完全に乾燥し、中まで黒くなっていたり、真っ二つに折れたりしていました。

これらの物を実際に見て、本当にすさまじい破壊力を持っていると感じました。そんな爆弾が長崎の人々の上に落ちてきたのは本当に恐ろしいことだと思います。もう絶対にこのようなことは起きてはいけなし、そのような武器も持ってはいけなしと思いました。

最後になりますが、僕の将来の夢は科学者になることです。しかし、この恐ろしい爆弾を作ったのも科学者です。今回、僕は、長崎平和大使として核兵器の恐ろしさと被爆者の方の悲しみや苦しさをたくさん知ることができました。なので、僕は、純粋に産業や生活の為の物を作り、武器や軍事目的で利用することを許さない科学者になるために、平和について勉強して、できる限り多くの人に核兵器・戦争の恐ろしさ、苦しみを伝えていき、未来の世界がより平和になるように少しでも貢献していきたいと思っています。

『私が伝えていくべきこと』

第四中学校 1年 朝生 蘭

今回、私は平和大使として、多くのことを学んできました。平和案内人さんのお話、平和公園、平和祈念式典への参列、平和学習コースへの参加、グラバー園見学など、実に多くのことを体験させていただきました。

まず、平和案内人さんの話です。平和案内人さんには被爆建造物・原爆資料館ガイドをしていただきました。その中でも、特に印象的な話は、平和の像の意味を教えてくださいました。平和案内人さんの話を聞いて、私自身が未来の人へ語り継ごうと決めました。

次に、平和祈念式典への参列の話をしてします。式典は被爆者合唱から始まりましたが、被爆者の方々だけで作られた合唱団の歌は、もう二度と戦争をしてはいけないという思いがこめられていました。

最後に、平和学習コース（青少年ピースフォーラム）の話をしてします。この平和学習は、二日間かけて学びました。その中でも、私が印象に残っているのは、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館です。ここでは、水の中にある点の数が被爆して亡くなった人々を表していて、夜にはライトアップされます。なぜ水の中に点があるかという、被爆して亡くなった方々は、たいへん水を求めて亡くなってしまったので、水の中に点があるということでした。

私はこの四日間、長崎訪問をし、色々な人から話を聞いたり実際に見たりしましたが、被爆者の方々が未来の人々に望むことは同じです。それは、「私たちのような戦争をやってはいけない。原爆が落ちて70年、後遺症で、被爆者はどんどん亡くなっていく。このままでは、同じことがくり返されてしまう。だから、そのことを

多くの人に伝えて行ってほしい。」被爆者の方々は、そう望まれています。だから、平和大使の私には、戦争の悲惨さ、平和の尊さ、核兵器の恐ろしさを次の世代に、また、未来の人々に伝えていかななくてはならない義務があると思います。

『経験』

第四中学校 3年 田島 歩夢

今から70年前の8月9日11時2分、長崎市松山町上空約500メートルで原子爆弾が爆発し、たくさんの死者、負傷者がでました。

僕は長崎に行って戦争の恐ろしさ、いつも近くにいる人の大切さを学びました。

現地で実際に被爆された方の話を聞いて印象に残った一言があります。「もう私たちのような経験者を出してはいけない。」という言葉です。もう二度と繰り返してはいけないという思いから、より多くの人に自分の経験を話そうと思ったそうです。もし自分がその立場ならつらくて絶対に自分の経験を話すことができないと思います。しかし、これからのことを考えて勇気をふりしぼって決意されたのだと思います。僕は実際に経験していないので聞いたことを伝えることしかできませんが、こういう方々の思いを受け止め、しっかり伝えていきたいです。

また、70年前は戦争により家族がバラバラで暮らすこともあり、いつ家族が戦死してしまうか分からない不安と葛藤していたはずです。

そんなことを思うと、今、毎日家族や大切な人の笑顔を見ることができ、食べ物を食べられ、歌を聞ける、これを当たり前と思ってはいけないと思います。

今、日本はまた戦争への道を歩み始めているように思われることがあります。僕はいつまでも、みんなの笑顔を見ていきたいので、まずこれからの世の中を担う僕たちが戦争の恐ろしさを伝え、そして松戸市から千葉県、千葉県から全国へ、そしてさらに世界へと広げ戦争が無い明るい世界にすることを誓います。

最後に、今回僕は男子でただ一人の3年生なので、リーダーという大役、さらに

ピースフォーラムで修了証書を全国の代表として受け取ることができ、良い経験ができました。

力不足な所がたくさんあり、迷惑をかけることがたくさんありました。しかし引率の先生方、僕を除く21名の平和大使の皆さんのおかげで大役を終えることができました。心から感謝しています。ありがとうございました。

『伝え続けるということ』

第五中学校 1年 佐藤 駿太

僕は今回長崎被爆70周年及び世界平和都市宣言30周年というこの節目の年に第8回平和大使として長崎を訪れ、自分の目で見たり、聞いたり、話し合ったりして様々なことを学ぶことができ、また感じられることがたくさんありました。

一番印象に残ったのはやはり原子爆弾についてです。今まで僕が知っていたことよりも原子爆弾はこの世の物とは思えないほど、恐ろしいものでした。同時に知らないこともありました。上空約500メートル付近で破裂し一瞬で7万人以上の死者を出した原子爆弾。そのエネルギーは50パーセントが爆風、35パーセントが熱線、15パーセントが放射線だそうです。エネルギーの半分を占める爆風は多くの建築物を倒壊させ、熱線は人々の体の水分を蒸発させたり重度の火傷を負わせたりさせ、放射線は目に見えないため知らぬうちに体内に入りこみ長年病気と恐怖を与え続けています。原爆資料館では当時の焼け野原になってしまった長崎の写真や体が黒こげになってしまった人の写真・原爆の被害によって変形してしまったジュース瓶や瓦、ボロボロになってしまった服など原子爆弾の悲惨さと恐怖を伝えていました。また、今も世界にある約15,700発もの核兵器の廃絶も訴えていました。

次は被爆した方々についてです。戦争に出兵していたのは大人だけですが、被害を受けたのは小さな子どもも同じです。原子爆弾が投下されたとき空襲警報は解除されていたため、防空壕に入っていなかったそうです。原爆投下中心地から500メートル程にある城山小学校は、その時学校は夏休みだったと平和案内人さんが話してくださいました。それでも生徒はほとんどの方が亡くなりました。この話を聞

いた時「戦争に関わっていない人でも亡くなってしまふ、それが現実なんだ」そう感じました。

最後にこの平和大使長崎派遣事業に参加して戦争や平和に対する気持ちや考えが変わりました。今まではただ「戦争は悲惨だったんだ」とか「戦争はしてはいけない」と思っていました。それも大切だけど、まずは殺人だとか自殺という、身近に死を感じることを無くしていけるよう自分が平和案内人さんに戦争の悲惨さやむごさを伝えていただいたように、僕も平和の尊さやありがたさを後世の人に伝え続けたいと思います。

『残すべきもの』

第六中学校 2年 小林 優人

僕は平和大使として長崎へ行き、普段はできないとても貴重な体験をさせていただきました。

1945年8月9日午前11時2分、この時浦上に一発の原子爆弾が落とされました。その一秒前までは、浦上天主堂や稲佐山などの美しい長崎の街がありました。しかし、一発の原爆によって、その美しい街、約7万もの人々、たくさん大切なものが奪われました。そして生き残った人々も、後遺症に今も苦しめられているそうです。

僕は平和案内人の方とお話をした時に感動したことがありました。それは平和案内人の方の被爆者としての使命を感じるものでした。

「広島は原爆ドームが世界文化遺産になっていて世界的に知名度があるけど、こっち（長崎）には中に入れる城山小学校や山王神社の二の鳥居などが残っている。『明治の産業革命遺産』みたいに都道府県をまたいで広島、長崎を世界遺産に登録して、日本に二度も原爆が落とされたことを風化させないようにしたい。」。僕は大変熱意を感じました。

僕の周りには、原爆が落とされた時間どころか、落とされた日、終戦の日すら知らない人がいて、やはりそのようなことでも70年もたつと無くなってしまいうんだな、このままだとただの昔話のようになってしまおうと思ひ、友達に原爆の恐ろしさや平和の尊さを伝えていくことが平和大使としての使命だと思いました。

そうして伝わった人にも原爆の恐ろしさや平和の尊さを多くの人に伝えてもらって、平和な世界を作りたいと思いました。

『二十四万通りの被爆体験』

第六中学校 2年 山下 優月

長崎を訪れる前の私は70年前に日本に原爆が投下され、日本は戦争に負けたという実におおまかなことしか理解していませんでした。それゆえ、原爆とはどういったものか、本当に何も知らなかったのです。

長崎派遣二日目、平和案内人で被爆者でもある方が原爆について細かく丁寧に教えてくださいましたが、何より一番私の心に残ったのは、ガイドの方の一言でした。

「原爆が落とされた時、24万人がそれぞれの地でそれぞれ違った生活をしていた訳だから、同じ被爆体験はない。」私はあまりの現実に耳を疑ってしまいました。無傷の方もいれば、亡くなられた方、後遺症に苦しみ続けている方もいる。とても受け止めきれぬ話ではありません。

しかし、今長崎では、過去の現実をただ知ろうとするだけでなく、今回私たちが参加したピースフォーラムのように、全国の若者に現実を知ってもらい、戦争を知らない世代にも戦争を身近に感じてもらい、少しでも多くの人に伝えていって欲しい、と未来の平和のために動き出しています。

さて、平和とは何でしょうか。答えは一人一人の立場で異なります。学生なら毎日勉強でき、いじめがないこと。家庭がある人なら、家族が健康で幸せなこと。私はピースフォーラムで、「平和な時＝幸せな時＝輝いている時」という言葉を耳にしました。これを受けて私個人の意見としては、自由があることだと思います。好きなことができる、これほどの幸せはありません。人々はこのことに感謝の気持ちを持つべきです。そして、毎日をなんとなく過ごすのではなく、自分は幸せだ、という気持ちを持ち、そして戦争に関心をもって、戦争は例えどんなことがあろうと絶

対にしてはいけない、という強い意志を持つことが平和な未来を築いていくことに繋がると思います。一人が変われば世界もきっと変わる！少し信じがたいこの言葉を一人でも多くの人々が信じられるように私は長崎での経験を多くの人に伝え、最終的には世界中の人々が平和で幸せな毎日を送れるように努力していきたいと思います。

『長崎で感じたこと』

常盤平中学校 1年 田崎 和

「怖い」と「苦しい」

それが、私が長崎に行って一番感じたことです。今回、長崎へ行き、本当の戦争が分かった気がしました。

まず、怖いと思った理由は、原爆資料館の写真を見たことです。戦争のことは、ある程度は分かっていたつもりでした。なので、悲惨な写真があるということも理解していたはずなのに、怖いと思ってしまいました。何でこんなことが起きたんだろう、若い人や動物が死ぬ必要はあったのかな、そもそも、この戦争で日本は何を手に入れたのかな、そんなことを考えている間、涙が出ていました。自分がもし写真の中にいたらと、考えただけで震えが止まりませんでした。こんなに怖いのに、お国のために死ぬのは当たり前と言っていたなんてどんな思いだったんだろうな、そう考えているだけで悲しくなりました。

次に、苦しいと思ったのは自分で考えている時です。一日の学習が終わり、皆で反省をしていたときに、苦しくなりました。こんなにたくさんのかんことを学んでも被爆者の方は救えないのかなと思うと、苦しくなりました。何でこんなことが起きたんだろう、たくさん考えました。でも、分かりませんでした。どうして戦争をしたの、と問いかけたくなりました。戦争を始めた人が許せませんでした。

平和を生むのも人間、争いを生むのも人間というのが、今回分かりました。人間は、絶大な力を持っていると思います。なので、何だって作り出すことは可能だと思います。でも、それは紙一重で悪いことにも使うことができます。戦争は色んな人の人生を狂わせてしまいます。何も罪のない人の命を奪っていきま

す。そんなことはあってはいけない、そういう思いが長崎に行き、強まりました。

たくさんの許せないを長崎で感じました。でも、許せないという気持ちをなくすことは無理なので未来に二度と同じことが起きないように、この思いを色々な人に伝えて行きたいです。

『ナガサキ ～平和大使長崎派遣報告書～』

小金南中学校 1年 須藤 巧

長崎に降り立ち、何と素敵なお街並みだろう。夏の暑さもなぜか心地よく感じられる、とても穏やかな風景に、僕の「長崎」という地への固定概念は、一瞬にして変わりました。歴史を感じられる路面電車が長崎市内を走り交い、異国情緒あふれ、緑が多く、そして坂も多い。眼下に広がる出島の港には、豪華客船が停泊し、空を見上げると、とんびが優雅に飛んでいる。

僕は、この夏、平和大使として、長崎へ派遣していただきました。平和案内人さんによるガイドのもと、被爆建造物、原爆資料館、平和公園、爆心地から西方約500メートルの場所にある城山小学校、原爆中心地を見学し、全国から集まった小学生、中学生、高校生と共に青少年ピースフォーラムに参加し、平和学習を通じて、お互いの平和に対する意見交換を行い、被爆70周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列しました。

今から70年前の1945年8月9日午前11時2分、長崎市松山町の上空約9,600メートルで、一発の原子爆弾が長崎の街に投下されました。凄まじい爆風と熱線、放射線によって、一瞬にして長崎の街は廃墟と化しました。原子爆弾には二種類あり、広島に投下されたウラン型原爆リトルボーイ（チビという意味）、長崎に投下されたプルトニウム型原爆ファットマン（太っちょという意味）があります。長崎に投下されたプルトニウム型原爆ファットマンは、上空約500メートルで爆発し、10分弱で上空9,000メートル位の雲になります。この光景が、あのきのこ雲です。温度は中心付近で数万度、爆発した真下の地上で3,000度から4,000度、1キロメートル付近でも約1,800度、1.5キロメートル付近でも6

00度以上です。原子爆弾は、核分裂性物質（プルトニウム等）が核分裂する時に発生する高いエネルギーを兵器として利用したもので、一瞬で全てを破壊します。爆発の瞬間、放射線が放出され、続いて猛烈な熱線と爆風が全てを襲います。放射線は、核分裂性物質が核分裂した際に発生するガンマ線や中性子線等が、人間の体内に入って細胞を破壊し、大勢の人たちの命を奪い、また、生き残った人たちには、長い期間にわたり、深刻な障害を与え続けます。熱線による凄まじいエネルギーで燃えるものは全て火を噴き、爆心地から1.2キロメートル以内では、あまりの高熱に一瞬のうちに身体が炭化し、内臓の水分さえ蒸発したと考えられ、また、爆風は、爆心地から1キロメートル以内では、鉄筋コンクリートの建物がところどころ残り、人々は吹き飛ばされ、無数のガラスや木片を全身に浴びました。その後の火災によって被害は増大しました。

この一発の原子爆弾で、当時長崎にいた約24万人の市民のうち、約7万4千人が亡くなり、約7万5千人が傷つきました。この中には、多くの外国人も含まれています。大量の放射線の影響で、一年で3千人以上の方が亡くなり続けています。

「70年」という月日が過ぎても、長崎の人々が受けた悲しみや苦しみは、決して癒されることはなく、月日の流れと共に、深く、そして重くなっていくと、この長崎へ来て、僕は実感しました。「原子爆弾は戦争の中で生まれ、戦争の中で使われました」という、長崎市長の長崎平和宣言の言葉に、「戦争」は、戦争というものに取り憑かれた人間が、善意の判断、人間として超えてはならない一線すら分からなくさせる、本当に恐ろしいものだと思います。戦争さえなければ、核兵器を作り、使うことも、これほど多くの人々を犠牲にし、苦しめることもなかったと思います。

平和大使として参加させていただいたこの四日間で、改めて「戦争」と「平和」について学び、戦後70年の今も、戦争によって、戦争の中で使われた原子爆弾によって、たくさんの命を犠牲にし、そして身も心も傷つけられ続けている人たちが

いることを、戦争を経験していない僕たちは、決して忘れることなく、起こってしまった事実を風化させることなく、事実をきちんと後世に伝えていかなければならないと思います。そして、戦争の中で人間によって作り出され使用された原子爆弾を僕たちの意志で使用しない、「戦争」という悪魔に負けない強さを持つ人間でありたいと思います。今、この瞬間も世界中では、戦争が起こり、多くの人々が傷ついている現実にも目を向けて、本当の意味での「平和」を理解し、訴え続けていかなければならないと思います。

最後に、戦後70年、松戸市世界平和都市宣言30周年という節目に、長崎へ派遣していただいたこと、何も分からない僕たちを温かく迎えて、受け入れてくださった長崎の方々、自らも被爆し、より多くの人たちに伝えようと、つらく悲しい体験を涙をこらえて話してくださった平和案内人の方々、長崎滞在中に支えてくださった松戸市の職員の方々、事前学習で素晴らしい演劇を観せてくださった千葉県立松戸高校の方々、長崎へ行き、学んで来たいという僕を快く送り出してくれた担任の先生、部活の顧問の先生、そして家族、全ての方々に感謝しています。ありがとうございました。

そして、城山小学校を世界遺産に登録するために、尽力している長崎の方々の思いと共に、僕もありたいと思います。

『長崎で戦争と平和について学ぶ』

小金南中学校 1年 萩原 真央

私は松戸市の平和大使として長崎に行き、実際にあった戦争のことについて学び、当時の話を聞いたり、感じたことを話し合ったりするなど、戦争は歴史上ではなく身近で起きた悲惨な出来事だと身をもって体験することができました。その中でも、特に印象に残ったものが三つあります。

一つ目は、長崎原爆資料館の見学です。原爆資料館では、戦争時の土地の様子や少年の頭にガラスが刺さってしまったままの写真、人々が町でどんどん倒れていっている映像などを見ました。私はそれを見て、残酷な場面もあったけど、その当時の様子がよく伝わってきて、戦争の恐ろしさをとても感じました。また、被爆者の写真で頭皮がやけどでむけてしまったり、体に傷を負ってしまったりしていたのを見て、二度と戦争をしてはいけないと強く心に思いました。それから、爆風でビンやガラス、お金や窓が変形するほどの熱風は、体に浴びたらどれほど熱かったのか、想像するだけでもぞっとしました。

二つ目は平和祈念式典です。式典では、原爆を体験した方々が歌を歌い、その素晴らしい歌声と迫力が今も耳の中に残っています。また、11時2分の黙祷の時にサイレンが鳴り、戦争を想像してみると、とてもつらくて苦しかった様子が目を閉じたら思い浮かんできました。日本中の人々が黙祷をしているとき、原爆の地で私もその中の一人として加われたことがとてもうれしいです。「戦争を二度としない」と祈った小さな想いも、日本中、世界中の人々が同じ想いでいれば、永遠の平和につながると思いました。

三つ目は、ピースフォーラムに参加したことです。ピースフォーラムでは、全国

の中高生が集まって平和について語り合いました。また、被爆者の方から戦争時「救急所へ助けを求めに行く途中の人々が、どんどん倒れて死んでいっている」という言葉を聞いてすごく驚きました。私がそんな光景を見ていたら、恐怖で歩けなくなっていると思います。

私たちは、長崎平和祈念式典に出席し、原爆資料館を見学して、実際に被爆者の話を自分の耳で聞くことができました。わずか70年前のことなのに、こんなに大変でつらくて苦しい生活をしていたとは、平和で豊かな時代しか知らない私たちには、考えられないほどです。

長崎での四日間、戦争の事実と悲惨さを知ったからこそ、より平和の大切さを知ることができたのだと思います。

今度は私たちが身近な人に平和の大切さ、核兵器や戦争の恐ろしさを伝えていくとともに、日本が二度と戦争をしないように祈ります。

『平和を大切にできる世界へ』

古ヶ崎中学校 1年 大久保 敦康

僕は、8月7日から8月10日まで、平和大使として長崎に行きました。ここで学んできたことは、未来を平和に築く力になることです。

はじめに、なぜこの事業に参加したかについて話します。僕は、小学生の頃から父の影響で、戦争や紛争に関係しているテレビをたくさん観ていました。その中で、一番心に響くものがあります。それは、実際の映像や画像です。僕は、いつもここで思わず、目をつぶってしまいます。なぜならマンガで見るようなとても悲惨なものばかりだからです。僕は、平和大使への参加募集の手紙をもらったときに、もっと戦争や核兵器の恐ろしさを知り、テレビで見たような悲惨な映像などをもう二度と起こさないように皆に伝えたいと思い参加しました。

次に、学んできたことについてです。僕は二日目の午前中に、平和案内人による被爆建造物・原爆資料館ガイドで学びました。ここでは平和公園・城山小学校・原爆中心地についてでした。平和公園にある平和祈念像や地面の模様には、全て意味のある形、デザインだということを教えてくれました。その中で一番みんなに知ってほしいと思ったことは、長崎の平和祈念像のポーズの意味についてです。平和祈念像の右手は、上を指でさしています。これは、原爆を示しているそうです。そして左手は、水平に真っすぐ伸ばしています。これは世界の平和を表しているそうです。また、なぜ平和記念像は緑色なのかというと、平成13年までは日本の山、富士山の山頂の白色を取り入れて白色でしたが、腐食を防止するため緑色にしたそうです。

この日の午後は、ピースフォーラムに参加しました。ここで被爆体験講話を聞き

ました。特に、一番心に響いたことは質問タイムの時のことです。ある人が、講師の方に、「どうしたら平和になると思いますか?」と、聞いていました。僕はこの時に、すごく大きな質問だなと思いました。しかし、講師の方はすぐに「やっぱり国同士が仲良くすること。」と答えました。僕は、すごく大きな質問なのにすぐ答えられるなんてやっぱりいつも平和を考えて願っている、それほど原爆は悲惨なことだったんだと心を打たれました。

最後に、平和祈念式典についてです。ここでは、ものすごく多くの人たちが参列していました。ここでも被爆者の話を聞きました。一つ一つの言葉が重く力強かったです。また、話していることを想像するだけでとても悲惨な様子が思い浮かぶのに、実際に体験したらどれだけ苦しく悲しかったのかと思うと、胸が苦しくなりました。また、外国の人もたくさん来ていてこれは世界中の人が平和を願っている証だと思いました。

僕は、この経験を皆に伝えていき、一人一人が平和を大切にできる世界に貢献します。

『心の壁を破る』

古ヶ崎中学校 2年 倉重 はるか

私は今回の長崎派遣で、平和に対する思いが強くなり、より深いものになりました。今までの私は、ただ平和に感謝をしているだけでした。何のために、誰のために、平和を大切にしているのかを、忘れかけていました。そんな時、長崎の地で被爆者の方のお話を聞き、「核が一日でも、一時間でも早く、無くなってほしいと願わない被爆者はいない。」との言葉を聞き、今まで被爆者の方々の思いを考えてこなかった自分への、恥ずかしさと惨めさでいっぱいになりました。その日から、私は、“本当の平和”や“被爆者の方々の思い”について、真剣に考えるようになりました。戦争が無くなるだけでは平和ではない。本当の平和は、戦争が無いことだけではなく、いじめや、反平和の行動が無いこと、そして私たち若い世代が、平和の大切さを実感することから始まっていくのだと気がつきました。

長崎の地で体験させていただいた経験の一つに被爆体験講話があります。話を聞いている時、私はなぜ、そんなにもつらい思いをしているのに、自分の言葉で語ってくださるのだろう、と不思議に思いました。私には知ることもできないほどの心の痛みが、語ること、思い出すこと全てつらく、語る覚悟や勇気が必要なのだと思います。被爆者の方の心の声が「同じあやまちを繰り返さないでほしい」「若い世代に同じ不幸を味わってほしくない」と、私の体中に迫ってきました。その思いは、今、私の胸に焼きついて離れません。心の中に重くのしかかってきました。

その一方、日本は加害者でもあるのです。戦争は、何の罪もない中国の人たちやアジアの人たちを虫けらのように殺してしまう日本兵を生み出します。そのことについて、ある本の中では「日本では、戦争は『昔の話』になりつつあるかもしれな

い。しかし、中国の人たちは忘れていない。韓・朝鮮半島の人たちは忘れていない。アジアの人たちは忘れていない。世界が忘れていない。当の日本人だけが忘れかけている。その『ギャップ』がこわい。」とありました。

平和とは、大人しく、ただ受け身の姿勢で待っているものではない。非暴力で戦っていき、その行動の中に「平和」がある。再び戦争という悪を絶対に起こさないために、私たちにできること。それは、無気力、無関心の心を打ち破り、信念を持ってやりとげていくことではないでしょうか。

今回の長崎派遣で学んだことを生かし、平和を訴えていかなければいけない使命を実感すると共に、平和の尊さを改めて感じることができました。

『松戸市平和大使長崎派遣事業報告書』

牧野原中学校 2年 清水 智也

僕は、長崎へ出発する前日、明日から想像もできないような悲しく、むなしい過去を学ぶのだと、覚悟をしていました。しかし、そこでたくさん目のにしたこと、耳にしたことは、聞くだけでもつらく、目をそむけたくなるような話ばかりでした。

1945年8月9日、長崎に落とされた原爆により、今まで何気なく会話をし、過ごしていた家や町が一瞬で廃墟と化し、約7万4千人の命を奪い、約7万5千人を負傷させ、長崎は、「地獄」となりました。70年たった今でも、放射線の影響により、白血病やがんで苦しむ人たちがたくさんいます。

長崎では、色々なことを体験させていただきました。まずは、平和案内人さんによる被爆建造物ガイドで、原爆落下中心地や、原爆落下中心地から最も近かった小学校、城山小学校を訪れました。城山小学校は、今では修復され子どもたちが元気に通っていますが、焼け残った校舎の一部が、被爆校舎として今も残されており、原爆の恐ろしさを物語っていました。ガイドさんが最後に教えてくださった「被爆者一人一人に違った被爆体験がある。」という言葉は、今でも心に強く残っています。

それから、ピースフォーラムにも参加しました。全国から来た、平和を願う小中学生たちと意見を交わし合ったことで、平和への思いがさらに強まりました。

次に、長崎原爆資料館を見学しました。黒く焼け焦げた死体が大量に転がっている写真や、皮フがただれた弟を背負って母親を探す子どもの写真など、とても現実とは思えないことが鮮明に残っていました。

そして、今回の長崎での一番大事な行事である、長崎平和祈念式典へ、松戸市の平和大使として参列しました。式の途中、11時2分に全員で黙とうをささげまし

た。そのとき、僕は、見た資料や聞いた被爆体験をもとにどんなことがあったのかを想像してみました。すると、足の震えが止まらないくらい、逃げ出したくなるくらい恐ろしくなりました。想像するだけでもそれほど怖いのに、被爆した人たちはどれくらい怖かったのかを考えると、涙が止まりませんでした。

この被爆した人々の恐怖、絶望、それでもなんとか平和を取り戻そうと頑張った人たちの勇姿、これらは、後世に伝えていかなければなりません。しかし、戦争を体験した人が少なくなっている今の日本で、つらさをそのまま伝えるというのはとても難しいことかもしれません。

そこで皆さん、是非積極的に、戦争の悲惨さ、原爆の恐ろしさを学んでください。被爆者の声に耳を傾け、戦争の記憶を風化させない努力をしてください。

世界には、まだ1万5千発以上の核兵器があります。しかもそれらは、長崎に投下された原爆よりも威力が強く、さらに大きな被害をもたらします。

日本は、世界で唯一の被爆国として、核兵器の廃絶を各国に訴えています。ですがその思いは、広島、長崎の人たちだけが持つのではなく、全国民が持つことで、さらに訴える力が強まります。僕も平和大使として、これからもずっと、原爆によって起こった事実や、被爆者の思いを伝えていこうと思いますが、皆さんも、少しでも多く戦争のことを知り、次の世代へ発信して行って下さい。そしていつか必ず、「戦争・核兵器」がこの世から無くなることを心から願いましょう。

『平和大使長崎派遣に参加して』

牧野原中学校 1年 木村 史来

今回私は平和大使として、今まで知らなかったことを原爆投下地である長崎の地で見て聞いて感じてくることができました。その中でも特に印象に残ったのが、青少年ピースフォーラムの被爆体験講話、城山小学校の見学、原爆資料館の見学です。

まず、被爆体験講話では中村一俊さんがお話をしてくれました。聞いていると悲しくなってくるようなお話でした。

城山小学校は、昭和20年8月9日11時2分に長崎市に原爆が落とされた際、爆心地より西方約500メートルのところにありました。校舎は鉄筋コンクリートの3階建てでしたが、原爆による被害で2階と3階は全焼したそうです。そして当時学校にいた教職員31人のうち28人が亡くなり、約1,500人の児童のうち約1,400人が亡くなりました。僕は城山小学校を見学して、鉄筋コンクリートにも関わらず一瞬にして全焼したことを知り驚きました。また、亡くなった児童のほとんどが自宅で亡くなっていたことがのちの調べで分かったそうです。

次に、原爆資料館の見学では、11時2分で止まった柱時計、ガラスの刺さった服、ものすごい熱線で変形したビンなど、その当時の物を見ることができて大変勉強になったと同時に、当時の悲惨な状況を実際に感じることができ、言葉で表現できない気持ちになりました。

今こうして何も困らず食べて学んで遊んでと、自分のしたいことができる幸せに、感謝の気持ちを忘れてはいけないと思いました。なぜなら70年前の戦争では、好きなこともできず、満足に食べることもできず、何よりも放射線による被害を受け今でも後遺症に悩まされている方々がいらっしゃるという現実を目の前で感じたか

らです。今も後遺症に苦しんでいらっしゃるということは、被爆された方の中では、もしかしたら戦争はまだ終わっていないのではと思いました。

戦争の無い平和な世界を作るために、まず一人一人皆が隣にいる友達と仲良く笑顔でいること、そんな些細なことで争いは無くなるとも教えていただきました。

戦争をもう二度と起こしてはいけないと強く思いました。そのために私に何ができるか、真剣に考えて生きていきたいと思えます。

『私が伝えていきたいこと』

河原塚中学校 1年 吉田 真帆

私にとって「戦争」は、以前までは、あまり触れたくないことでした。写真や映像で見るのは怖いし、同じ日本でそんなにも悲しいことが起きたなんて、あまりにも今の日常とかけ離れていたからです。

しかし、長崎で学んで変わりました。戦争がもたらす悲劇を知ること、戦争を起こしてはならないと改めて思いました。悲惨な戦争を繰り返してはならないということは、全人類が絶対に知っておかなくてはならないことです。

一人一人が戦争の悲惨さ、恐ろしさ、平和の尊さ、大切さをしっかり考えなければなりません。70年前の終戦後、もう戦争はしないと決めたからこそ、今の日本があり、平和について深く考えることができるのです。

私が一人でも多くの人に伝えたいことは、今、当たり前で生活できることをありがたく思わなければいけないということです。戦時中は、それまでの生活が一変し、何もかもが奪われてしまいました。

私は、なぜ世界が戦争に燃えていたのかが分かりません。戦争よりもっと重要なことは、平和な世界に、人々が幸せに暮らせることではないでしょうか。国と国とが、お互いの主張を通すために、話し合いではなく、武力を行使し、国民同士が殺し合うなんて、考えられません。

まだまだ世界では、戦争や紛争、核兵器が存在しています。これらが無くなれば世界が平和に近づくということを知らない人がいます。その人たちはきっと、「平和」の尊さを分かっていません。だから、私は一人でも多くの方が戦争について知る必要があると思います。また、これからの日本を支えていく私たちの世代も、知って

おくべきことだと思えます。

私は、平和大使として長崎に行かせていただいたことを心から感謝しています。長崎で学んだことは、私にとって、とても大きなことでした。この世界が、もっともっと平和になるように、私に何ができるか、これからもずっと考えていきたいと思えます。

『平和の尊さ』

和名ヶ谷中学校 2年 飯銅 千尋

私は今回初めて長崎に行き、今まで詳しく知らなかった被爆の実相や原爆の恐ろしさを学びました。

二日間の青少年ピースフォーラムでは、70年前に11歳で被爆された方の話を聞きました。その方は、原爆を投下された当時、道にいた少年に水を求められたそうです。ですが、離ればなれになった家族を探していたためその少年に水を与えることができませんでした。このことを今でも夢に出てくるほど後悔しているとお話していました。戦争は長い年月にわたって人々の心と体を傷つけ、何もかもを奪うとても恐ろしいものです。

このことから、平和がどれだけありがたく、大切かが分かります。それは、私たちがおいしいご飯を毎日食べられること。つまり当たり前に行っていることです。いつもの「いただきます」という言葉がもっと重みのあるものを感じました。

それに、自分の好きなことができるということも平和なことだと思います。この先は、どうなるか分かりません。今、この世界には70年前に長崎へ投下され、当時73,884人の死者と、74,909人の負傷者を出したあの原子爆弾を超える威力を持った核兵器が存在しています。それらが全て使われたら地球から人間は消えてしまいます。

そのような核兵器がなくなることを目指し、国際社会では廃絶へ向けた動きが高まっています。そして被爆国である日本には「持たない」「作らない」「持ち込ませない」という三つの原則、非核三原則があります。また、被爆者の方々には長崎が最後の被爆地となってほしいという願いがあります。被爆者の方々から直接お話を

聞くことは年々難しくなっていますが、つらい中話して下さったことをそのまま後世へ伝えていくことが平和への第一歩であり、私たちの使命でもあると思います。

戦争は二度と起こしてはいけないものです。ですが、決して忘れてはいけません。そしてたくさんの方が平和の尊さを感じる事が大切だと感じました。

『長崎に行って感じたこと』

旭町中学校 2年 井上 未来

私は、今回長崎平和大使になって戦争のことを学びに行きたくさん感じたことがありました。

長崎は、戦争が起こって原爆を落とされた最後の場所だということを初めて知りました。私は、インターネットなどでは分からない細かいことや、被害がどれだけの悲惨さだったかを現地で目や体で学ぶために行きました。実際に3泊4日で学んだことは、言葉では表せないものでした。原爆資料館や平和祈念式典が行われた平和公園、青少年ピースフォーラムに参加し、そこで平和の大切さや今普通の暮らしができていることがとても幸せであること、もう二度と戦争をしてはいけないこと、これから若い人たちに戦争のことを伝えていかなければいけないことなどたくさん学ぶことができました。

二日目に行った原爆資料館では当時の写真や実際に使われていた物などを見ました。溶けてしまったビンや、人間が炭になってしまったり、肌が溶けて垂れ下がったりした写真などを見ました。原子爆弾は、手で表しきれないほど大きく、それが空から落ちてくるとなると恐ろしいなと思いました。

青少年ピースフォーラムでは、全国から来ていた人たちと平和のことを話し合いました。また、フィールドワークで訪れた平和祈念館は鶴がおさめられている所や被爆者の手記が展示してある所がありました。私も一生懸命に折った鶴を原爆資料館におさめられて良かったです。そして色々な資料を見て、当時の悲惨さがとても良く分かりました。

話し合いをした時は色々な人と交流をしたので、そういうことの積み重ねで平和

へとつながっていくのだなと思いました。

平和祈念式典に参列して来ました。安倍総理大臣や実際に戦争を体験した方のお話を聞き、11時2分に黙とうをしました。その時、亡くなった方に感謝の思いを伝えることができました。これからは、平和のために非核三原則の「持たない、作らない、持ち込ませない」を世界に広げていかなければいけないなと思いました。核兵器を持っている国はまだたくさんあり、多い順番でロシア、アメリカ、フランスで、他にも持っている国はあり、国に危ないことが起こった時にいつでも使える状態です。こういう国があるからまだ完全に平和だと言えないのだなと思いました。

この現状をたくさんの人に知ってもらえて、少しでも戦争で亡くなった方々のおかげで今があることを身近で感じてもらえる人がもっといたらいいなと思いました。

私は今回平和大使で21人もの友達ができ、青少年ピースフォーラムでは沖縄に住んでいる子ども友達になりました。なので、今回一つ平和へつながることができたのではないかなと思います。今まで通り平和がこれからも続いていけるよう、一人でも多く平和のためになるようなことをしてほしいなと思います。私もそのために頑張らないといけないなと改めて思います。

平和大使に選ばれたからには、勉強しに行って学んだことを一度皆に伝えるだけでなく、これからもっとたくさんの方々に今回学んだことを伝えていけるようにし、戦争のことを知っていて、心の中にいつも戦争や平和のことを思っていてくれる人が世界中に増えたらいいなと思います。今回このような貴重な経験ができて良かったです。

『平和をつなぐ』

小金北中学校 1年 島岡 里帆

1945年8月9日11時2分。

70年前、一発の原子爆弾によって、長崎は一瞬にして地獄のようになりました。

あの時、何が起きて、どんな苦しみを人々に与えたのか。私は、長崎に行って原爆について知りたいと思いました。また、日本人として知らなくてはならないことだと思ったので、長崎に行かせていただきました。

長崎では、被爆者の方の話を聞いたり、平和祈念式典に参列したりと、とても貴重な体験ができ、原爆の恐ろしさと平和の尊さを学びました。実際に戦争や原爆を経験していない私でも、「もう二度と原爆を使ってはならない。戦争をしてはいけない。」と分かりました。

この経験で、印象に残ったことが二つあります。

一つ目は、平和の尊さが本当に実感できた、原爆資料館で見た写真・資料や、被爆者の方の話から分かった、私たちの想像を越える原爆の被害の惨状です。私は、たった一発の原爆によって一瞬にして、それぞれの目の前の風景、今までの生活、友達、家族、そして心身までがこんなにも壊され、狂わされてしまうのか、と驚きました。また、こんなにも「死」が身近になった日が、実際に70年前にあったことが受け入れられませんでした。

二度と、あの日の光景をくり返してはならない。そう感じました。

二つ目は、今も被爆者の方がいて、70年前からずっと苦しんでいる、ということです。その方々は、70年前の地獄を目の当たりにし、心身に傷を負った方々です。また、その方々の存在が、「原爆は昔話じゃない」ということを私たちに教えて

くれています。

しかし、いつかは被爆者の方の思いがこもった「声」を聞くことができなくなると思います。

それでも、そのまま原爆を「昔話」で終わらせずに、私たちが「声」の代わりになって、原爆の恐ろしさと平和の尊さを伝えていけたらいいな、と思いました。

今日の平和、明日の平和、未来の平和・・・と、私たちはこの「当たり前の平和」が続くと心のどこかで思っています。しかし、この平和が続くという保証はどこにもありません。それでも、この平和をずっと守り続けるために、今回学んだことを広めていきたいと思いました。

二度と原爆が使われないように、今回学んだことを大事にして、平和をつないでいく努力をしたいです。

『第8回平和大使として』

聖徳大学附属女子中学校 2年 藤井 友紀

私は3泊4日で長崎の被爆についてたくさんのことを学んできました。

特に印象に残ったことは、今まで写真でしか見たことがなかった、被爆した建物や軍服、時計などの実物を見たことです。また、熱線で溶けてしまった瓶やガラス、表札などを見て、普段の生活ではありえないことが実際に起きたと思うと、被爆された方は私たちが想像できないくらい熱くて、怖くて、つらかっただろうなと思いました。

平和案内人さんのお話では、自分の知らなかったことをたくさん教えていただき、とても勉強になりました。そして、城山小学校や平和公園、原爆落下中心地碑などを案内していただき、その時その場で何があったのかを詳しく説明していただきました。

平和祈念式典でも、とても印象に残っていることがあります。

一つ目は、被爆者の方の平和への誓いです。戦争を二度と繰り返さないでほしいという強い気持ちと、平和であり続けてほしいと願っていることをとても感じられる内容でした。

二つ目は、被爆された方々による合唱です。合唱曲は、戦争がよかったことが分かるとても印象的な歌詞で、このまま歌い継がれてほしいと思いました。

青少年ピースフォーラムでは、原子爆弾や核兵器について全国から集まった同年代の人たちと学び、意見交換をしました。平和についてたくさん考えることができ、改めて平和の尊さ、難しさが分かりました。

今回の体験で、広島に落ちた原子爆弾より、長崎に落ちた原子爆弾の方が大きく、

威力が強かったことを私は初めて知りました。他にも初めて知ったことがたくさんあり、現地に行って学ぶことができ良かったです。

結団式の時、長崎の原爆について全然知らないと言った私が、平和大使として長崎に派遣され、現地でたくさんのことを学び、今はそれを伝えていく側になりました。私は、たくさんの人に伝えるために、学校の文化祭や学年集会で今回学んだことを発表しました。

戦後70年という今、実際に戦争を体験された方は少なくなってきています。そういう今だからこそ、第8回平和大使としてたくさんの人に戦争のこと、被爆地のこと、被爆者の方のことを伝えていきたいです。そして、平和とは何かを考えていきたいです。

『長崎で学んだこと』

聖徳大学附属女子中学校 2年 山田 佳那

私は、松戸市平和大使として長崎を訪れました。長崎では被爆校である城山小学校をはじめ、平和祈念公園にある爆心地や原爆資料館などで原爆の恐ろしさについて学んできました。

原爆資料館では、全身の皮膚が溶けてしまった人の写真や、丸こげになった遺体の写真がたくさん展示してありました。写真を見ているだけでもつらいのに、実際に被爆した人の気持ちを考えると胸が苦しくなりました。また、平和祈念式典でお話をしてくださった被爆者の谷口さんの写真もありました。谷口さんは背中に大火傷を負い、生きているのもつらそうでした。

全国から集まった平和大使との集いであるピースフォーラムにも参加しました。そこでは、「戦争」や「平和」について意見交換をしました。

例えば、「世界を平和にするためにはどうすればよいか。」というテーマでは、「自分の周りにいる人を大切にする。」「みんながいつでも笑顔でいられる環境をつくる。」などの意見がでました。今を生きる私たち一人一人が「平和」をつくる力を持っていると感じました。

特に、被爆者の中村さんが体験したお話がとても衝撃的でした。長崎に原爆が投下された時、中村さんは小学校6年生でした。原爆が投下された日は、中村さんはお母さんと一緒に食料を得るため農家の家に行っていました。中村さんとお母さんが帰ろうとした時、農家の少年が中村さんと遊びたいと何回も誘ってきたそうです。中村さんは、その少年が当時の特攻隊が持っていたお守りを二つ持っていたので、そのうちの一つをくれるなら遊ぶと言ったそうです。しかし、そのお守りは、前日

少年のお姉さんが作ってくれたものだからあげられないと断られました。そして、中村さんが帰ろうとすると、そのお守りをあげるから遊ぼうと誘ってきたそうです。そこで、中村さんはお母さんに先に帰っててもらうことにしました。中村さんはその少年と遊び、縁側で一休みをした瞬間に雷よりも大きい轟音と同時に家が崩れたそうです。中村さんとその少年は家の下敷きになりましたが、隙間があった為、助かりました。

中村さんは、急いで母親の行方を追いました。しかし、家の方向である爆心地に近づくと、辺り一面が焼け野原になっていて、電信柱と木の幹くらいしか残っていませんでした。

真っ黒に焦げた遺体が転がっていたり、皮膚が溶けて助けを求めたりしている人がたくさんいました。生き残った人でさえ、まるで死者の国にいるかのように希望を失ってうつむいて歩いている状態でした。その光景から中村さんは、お母さんは助からなかったと感じたそうです。中村さんは、お父さんを探しに行く途中で、布団の下から小さな男の子が「おにいちゃん、おにいちゃん」と中村さんを呼ぶ声が聞こえました。布団をめくってみると、今にも死んでしまいそうな男の子が「お水をちょうだい。」と言ってきたそうです。中村さんは助けてあげたいと思ったけれど、親に会いたいという気持ちで焦っていた為、その子に「後であげるから待っていて。」と伝え、その場を逃げるように去ったそうです。

お父さんと再会してから、その子のいた場所に戻ると、布団にハエがたくさんたかっけていてその子は既に亡くなっていたそうです。

中村さんは、死んでしまうと分かっている子に一口の水も与えないで、自分のことを優先してしまったことを70年経った今でも後悔しているそうです。

私は戦争を体験したことはありませんが、中村さんのお話を聞いて、原爆は、一瞬でたくさんの方の命だけではなく、周りの物すべてを破壊する恐ろしい物だと知

りました。また、中村さんのように70年経った今でも心や体の傷を負って生きている人がいるほど悲惨な戦争であったのだと感じました。

中村さんは、戦争を無くすためには「人と人、国と国が仲良く協力しあえば争いになることはない」とおっしゃっていました。

まずは、私たち一人一人が相手を思いやり、協力しあうこと、そして、暮らしやすい平和な環境を作ることが大切であると思います。

戦争で命を落とした犠牲者や被爆者の方々の体験や思いを無駄にしないように、今を生きる私たちが、「戦争の悲惨さ」や「平和の大切さ」について真剣に学び、それを後世に伝えていくことが私たちの使命だと感じました。

『平和大使長崎派遣で学んだこと』

専修大学松戸中学校 3年 福島 有香

今から70年前の8月9日午前11時2分、長崎に原子爆弾が投下されました。それまで美しかった長崎の町は、一瞬にして色を失い破壊されました。その様子はまるで地獄のようだったと被爆者の人は言います。私は今回の長崎派遣で様々な話を聞いたり資料や写真を見たりして、改めて原爆や戦争が持つ恐ろしさを感じました。

長崎に投下された原子爆弾は、とても大きくそれによる被害は悲惨なものでした。73,884人の死者と74,909人の負傷者で、死者と負傷者の数を足すと、当時の長崎市の人口の過半数にもものぼります。飛行機の飛行速度より速い爆風、原子爆弾が爆発する時に発生する熱線。それはとても熱く、約1,500度で鉄が溶けるのに対して、熱線は原爆直下で3,000度～4,000度だったそうです。その熱線によって大火傷をしたり爆死したり、多くの放射線を浴びて亡くなった人がたくさんいます。一瞬にしてたくさん命を奪いました。建物も崩れがれきの山となりました。現在も被爆者の人は後遺症に悩まされています。また、被爆者というだけで差別を受けたりもしました。戦争が生み出した原子爆弾は本当に恐ろしいです。だから、絶対に戦争をしてはいけないし、原子爆弾を使ってはいけないと強く思いました。

今、日本は戦争をしていません。戦争の無い時代に生まれた私たちは、当たり前のように学校に通い様々な教科を勉強して、お腹いっぱいご飯を食べて好きな部活を楽しんでいます。戦争中は学校に行っても授業中サイレンが鳴り、爆撃の音も聞こえ、ご飯は少なかったそうです。毎日サイレンの音におびえながら生活していた

そうです。私はそれを知った時、今の当たり前だと思っていた生活が平和で幸せだと感じました。

そして今の私の役目は平和大使として、原爆に関わる話を周りの人や後世の人に伝えていくことです。被爆者の方々は、思い出すのがつらい自らの被爆体験を後世の人に伝えなければいけないという使命感を持って、語ってくださっています。私も少しでも力になれるように、平和大使の役目を果たしていきます。

今、世界中にある約17,500発の核兵器が無くなり、世界に平和が訪れることを願っています。

長崎平和宣言

昭和 20 年 8 月 9 日午前 11 時 2 分、一発の原子爆弾により、長崎の街は一瞬で廃墟と化しました。

大量の放射線が人々の体をつらぬき、想像を絶する熱線と爆風が街を襲いました。24 万人の市民のうち、7 万 4 千人が亡くなり、7 万 5 千人が傷つきました。70 年は草木も生えない、といわれた廃墟の浦上の丘は今、こうして緑に囲まれています。しかし、放射線に体を蝕まれ、後障害に苦しみ続けている被爆者は、あの日のことを 1 日たりとも忘れることはできません。

原子爆弾は戦争の中で生まれました。そして、戦争の中で使われました。

原子爆弾の凄まじい破壊力を身をもって知った被爆者は、核兵器は存在してはならない、そして二度と戦争をしてはならないと深く、強く、心に刻みました。日本国憲法における平和の理念は、こうした辛く厳しい経験と戦争の反省のなかから生まれ、戦後、我が国は平和国家としての道を歩んできました。長崎にとっても、日本にとっても、戦争をしないという平和の理念は永久に変えてはならない原点です。

今、戦後に生まれた世代が国民の多くを占めるようになり、戦争の記憶が私たちの社会から急速に失われつつあります。長崎や広島 of 被爆体験だけでなく、東京をはじめ多くの街を破壊した空襲、沖縄戦、そしてアジアの多くの人々を苦しめた悲惨な戦争の記憶を忘れてはなりません。

70 年を経た今、私たちに必要なことは、その記憶を語り継いでいくことです。

原爆や戦争を体験した日本、そして世界の皆さん、記憶を風化させないためにも、その経験を語ってください。

若い世代の皆さん、過去の話だと切り捨てずに、未来のあなたの身に起こるかもしれない話だからこそ伝えようとする、平和への思いをしっかりと受け止めてください。「私だったらどうするだろう」と想像してみてください。そして、「平和のために、私にできることは何だろう」と考えてみてください。若い世代の皆さんは、国境を越えて新しい関係を築いていく力を持っています。

世界の皆さん、戦争と核兵器のない世界を実現するための最も大きな力は私たち一人ひとりの中にあります。戦争の話に耳を傾け、核兵器廃絶の

署名に賛同し、原爆展に足を運ぶといった一人ひとりの活動も、集まれば大きな力になります。長崎では、被爆二世、三世をはじめ、次の世代が思いを受け継ぎ、動き始めています。

私たち一人ひとりの力こそが、戦争と核兵器のない世界を実現する最大の力です。市民社会の力は、政府を動かし、世界を動かす力なのです。

今年5月、核不拡散条約（NPT）再検討会議は、最終文書を採択できないまま閉幕しました。しかし、最終文書案には、核兵器を禁止しようとする国々の努力により、核軍縮について一歩踏み込んだ内容も盛り込むことができました。

NPT加盟国の首脳に訴えます。

今回の再検討会議を決して無駄にしないでください。国連総会などあらゆる機会に、核兵器禁止条約など法的枠組みを議論する努力を続けてください。

また、会議では被爆地訪問の重要性が、多くの国々に共有されました。改めて、長崎から呼びかけます。

オバマ大統領、そして核保有国をはじめ各国首脳 of 皆さん、世界中の皆さん、70年前、原子雲の下で何があったのか、長崎や広島を訪れて確かめてください。被爆者が、単なる被害者としてではなく、“人類の一員”として、今も懸命に伝えようとしていることを感じとってください。

日本政府に訴えます。

国の安全保障は、核抑止力に頼らない方法を検討してください。アメリカ、日本、韓国、中国など多くの国の研究者が提案しているように、北東アジア非核兵器地帯の設立によって、それは可能です。未来を見据え、“核の傘”から“非核の傘”への転換について、ぜひ検討してください。

この夏、長崎では世界の約122の国や地域の子どもたちが、平和について考え、話し合う、「世界こども平和会議」を開きました。

11月には、長崎で初めての「パグウォッシュ会議世界大会」が開かれます。核兵器の恐ろしさを知ったアインシュタインの訴えから始まったこの会議には、世界の科学者が集まり、核兵器の問題を語り合い、平和のメッセージを長崎から世界に発信します。

「ピース・フロム・ナガサキ」。平和は長崎から。私たちはこの言葉を大切に守りながら、平和の種を蒔き続けます。

また、東日本大震災から4年が過ぎても、原発事故の影響で苦しんでいる福島 of 皆さんを、長崎はこれからも応援し続けます。

現在、国会では、国の安全保障のあり方を決める法案の審議が行われています。70年前に心に刻んだ誓いが、日本国憲法の平和の理念が、今揺らいでいるのではないかという不安と懸念が広がっています。政府と国会には、この不安と懸念の声に耳を傾け、英知を結集し、慎重で真摯な審議を行うことを求めます。

被爆者の平均年齢は今年80歳を超えました。日本政府には、国の責任において、被爆者の実態に即した援護の充実と被爆体験者が生きているうちの被爆地域拡大を強く要望します。

原子爆弾により亡くなられた方々に追悼の意を捧げ、私たち長崎市民は広島とともに、核兵器のない世界と平和の実現に向けて、全力を尽くし続けることを、ここに宣言します。

2015（平成27年）8月9日

長崎市長 田上 富久

以下、長崎平和宣言（ことばの解説）から抜粋

◆ 後障害

原爆による放射線障害は、急性障害と後障害に分けられます。急性障害は大量の放射線を浴びたとき出る症状で、嘔吐、下痢、発熱、皮下出血などを発症し、多くの方が死亡しました。

後障害は、被爆して数年から数十年してから現れる症状で、がんや白血病、白内障などがあります。昭和 21（1946）年初めから、火傷が治ったあとが盛り上がるケロイド症状が現れました。また、母親の胎内で被爆した胎内被爆児は出生後も死亡率が高く、死を免れても小頭症などの症状が現れることもありました。さらに、昭和 25（1950）年頃からは、白血病、甲状腺がん、乳がん、肺がんなど様々な病気の発生率が高くなり始めました。

放射線が年月を経て引き起こす影響については、未だ十分に解明されておらず、調査や研究が今も続けられています。

◆ 日本国憲法における平和の理念

日本国憲法の前文には、「政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し」、また「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」とうたっています。

その決意を実現するため、第 9 条第 1 項では、戦争の放棄をうたっています。日本国民の恒久平和の願いが不戦と平和の理念となっています。

◆ 東京をはじめ多くの街を破壊した空襲

第二次世界大戦末期には、東京、名古屋、大阪、神戸、福岡などの都市部を標的とした爆撃により、無差別に多くの方が被害を受けました。

特に東京は、昭和 19（1944）年 11 月 24 日以後、終戦まで、アメリカ軍の B29 型機によって度々爆撃を受け、昭和 20（1945）年 3 月 10 日の大空襲では、わずか 2 時間あまりに 10 万人の死者、11 万人の負傷者を出し、100 万人以上が家を失いました。

また、3 月 13 日には大阪も大空襲を受け、3 千人以上が死亡しました。終戦までに受けた空襲も合わせると、1 万人以上が亡くなったといわれています。

◆ 核兵器廃絶の署名

平成 27（2015）年 7 月現在、世界 160 か国・地域の 6,733 都市が加盟し、平成 32（2020）年までの核兵器廃絶を目指す平和首長会議は、平成 22（2010）

年 12 月から「核兵器禁止条約」の早期実現を目指した署名活動に取り組んでおり、署名の累計は 200 万筆を超えています。今年 4 月には、約 110 万筆の署名の目録をニューヨークの国連本部に届けました。

また、「ビリョクだけどもリョクじゃない」を合言葉に、署名活動を続けている高校生たちもいます。高校生が 1 年をかけて集めた署名は、平成 13 (2001) 年から毎年、ジュネーブの国連欧州本部に届けられています。

◆核不拡散条約（NPT）再検討会議

(1) 核不拡散条約

核不拡散条約（NPT）は、核保有国が増える（核が拡散する）ことを防ぐ目的でつくられた条約で、昭和 45 (1970) 年に発効しました。平成 15 (2003) 年 1 月に一方的に脱退を表明している北朝鮮も含めると、現在の国連加盟国の中で、インド、パキスタン、イスラエル、南スーダンの 4 か国を除く 191 か国・地域が加盟しています。

主な内容は、昭和 42 (1967) 年 1 月時点で核兵器を保有していたアメリカ・ロシア・イギリス・フランス・中国の 5 か国だけに核兵器の保有を認め（核保有国）、それ以外の国（非核保有国）が保有することを禁止しています。

核保有国には、核兵器を減らすための交渉を誠実にを行うことを求め、非核保有国には核兵器の製造、取得を禁じています。

また、非核保有国には、原子力の平和利用が認められており、原子力発電所を建設する場合は、必ずそれが平和利用であるかどうかを確認するために、国際原子力機関（IAEA）の検査を受ける義務があります。

しかし、イランは、原子力の平和利用を名目に核兵器を開発しているのではないかと疑いを持たれているほか、核保有国の核兵器の削減も進んでいないなど、多くの問題を抱えています。

核兵器の保有国を増やさないためにも、この条約内容に各国が真剣に取り組むことに加え、核兵器禁止条約など新たな取り組みも求められています。

(2) 再検討会議

核不拡散条約（NPT）では、核兵器の軍縮や拡散の状況を定期的に検討するため、5 年毎に再検討会議と、その間に 3 回から 4 回の準備委員会が開催されます。

平成 12 (2000) 年の再検討会議では、核保有国による核軍縮への努力が不足しているとの声が高まり、「核兵器の全面廃絶に対する核兵器保有国の明確な約束」を盛り込んだ合意文書が採択されました。

しかし、平成 17 (2005) 年の再検討会議は、核保有国と非核保有国の意見が鋭く対立し、成果を得ることなく閉幕しました。

平成 22 (2010) 年の再検討会議は前年にアメリカのオバマ大統領が登場し、「核兵器のない世界」への機運が高まる中で開催され、「核兵器のいかな

る使用も人道上、破滅的な結果をもたらすことを深く憂慮する」と核兵器の非人道性が明記された核軍縮に向けた 64 項目の行動計画を柱とする最終文書が採択されました。

平成 27（2015）年の再検討会議は、4 月 27 日から 5 月 22 日までニューヨークの国連本部で開催されました。最終文書は採択されないまま閉幕しましたが、参加国の多くが核兵器の非人道性に言及し、核兵器禁止に向けた法的枠組みについての議論を速やかに開始すべきであると訴えました。また、提示された文書案には、「すべての国々に対し、被爆した人々及び地域とやりとりし、その経験を直接共有する」という内容が盛り込まれ、「被爆地訪問の重要性」が多くの国々に共有され、今後につながる会議となりました。

◆国連総会

ニューヨークの国連本部で全加盟国の参加の下、開催される国際連合の会議のことです。国際連合憲章に定められた問題を話し合い、加盟国と安全保障理事会に対して勧告することができます。通常会期は、毎年 9 月第 3 火曜日から 12 月半ばまでですが、必要に応じ延長されることもあります。

平成 25（2013）年の国連総会第一委員会で、ニュージーランドが発表した「核兵器の人道上の影響に関する共同声明」には、日本を含む 125 か国が賛同しました。

平成 26（2014）年にも同趣旨の共同声明が発表され、日本を含む 155 か国が賛同しました。

今年も 9 月 15 日から開催される予定で、特に今年は核兵器禁止の法的枠組みなど、核保有国と非核保有国の対立を越える議論が期待されます。

◆核兵器禁止条約

核兵器の開発、実験、製造、配備、使用をすべて禁止して、また、現在、保有している核兵器を解体して使えなくする条約です。

核兵器禁止条約は、国際司法裁判所（ICJ）が平成 8（1996）年に「核兵器の使用・威嚇は一般的に国際法に違反する」とした勧告的意見が始まりとなりました。

平成 9（1997）年に国際反核法律家協会など 3 団体が、「核兵器は違法」とする考えに基づいて、モデル核兵器禁止条約の案を発表し、同じ年にコスタリカ政府が国連に提出しました。

平成 19（2007）年には、コスタリカとマレーシア両政府が、核不拡散条約（NPT）再検討会議準備委員会及び国連総会に改訂版の条約案を提出、平成 20（2008）年には潘基文（パン・ギムン）国連事務総長も、核軍縮に関する 5 項目の提言を発表して、禁止条約の検討を加盟各国に求めています。

最近では、核兵器の使用や保有などを禁止する簡潔な核兵器禁止の法的枠組みに関して、さまざまな案が提唱されています。

◆核抑止力

相手国が攻撃してきた場合、核兵器で反撃するという姿勢を見せることによって相手国の攻撃を思いとどまらせようとするのを、核兵器の抑止力といます。しかし、抑止力に固執すると、お互いに相手国より強力な核兵器を保有したり開発しようとするために、核の拡散につながり、逆に核兵器による攻撃の危険性が高まる可能性があります。

日本や韓国、NATO（北大西洋条約機構）の諸国はアメリカの核抑止力によって守られており、「核の傘の下にある」といいます。

これに対し、核抑止力に頼らない安全保障のあり方を、「非核の傘」ということもあります。長崎市は、その現実的で具体的な方法として、北東アジア非核兵器地帯を提案しています。

◆北東アジア非核兵器地帯

条約を結び、核兵器の製造、実験、取得、保有などをしないと約束することを非核化といい、非核化された地域のことを「非核兵器地帯」といいます。この条約によって核戦争の危機をなくし、国際的な緊張をやわらげることにもつながります。地球の南半球は、昭和 42（1967）年のラテン・アメリカ核兵器禁止条約のほか 4 つの条約（南極条約、南太平洋非核地帯条約、アフリカ非核兵器地帯条約、東南アジア非核兵器禁止条約）によって、すでに陸地のほとんどが非核化されています。

北半球でも、平成 10（1998）年にモンゴルの「非核地位」が国連で認められ、平成 21（2009）年には中央アジア（ウズベキスタン、タジキスタン、キルギス、トルクメニスタン、カザフスタン）非核兵器地帯条約が発効されています。

「北東アジア非核兵器地帯」とは、日本と韓国と北朝鮮の 3 か国を「非核兵器地帯」にしようとするものです。条約として成立するためには、3 か国に核兵器が存在せず、近隣の核保有国（アメリカ、ロシア、中国）が、3 か国を核兵器で攻撃をしないと約束することが必要になります。

日本では、昭和 46（1971）年に非核三原則の国会決議が行われ、また、韓国と北朝鮮による「朝鮮半島非核化共同宣言」が平成 4（1992）年に発効するなど、それぞれの国が非核化を表明しました。

しかし、平成 18（2006）年 10 月、北朝鮮が最初の核実験を実施し、さらに、平成 21（2009）年 5 月に 2 回目を、平成 25（2013）年 2 月に 3 回目の核実験を強行したことから、朝鮮半島の非核化の実現が困難な状況になりました。

北朝鮮の核を早急に放棄させるためにも、北東アジア非核兵器地帯の実現に向けて、日本政府や韓国政府が主導していくことが必要です。

◆世界こども平和会議

平成 27（2015）年 8 月 5 日、6 日、世界中の子どもたちと市内の中高生などが参加し、原爆の恐ろしさや平和の尊さを学ぶ世界こども平和会議が開かれました。

「過去を学び、現在を見つめ、明るい未来を描こう！」をコンセプトに開催されたこの会議では、原爆資料館の見学や被爆体験講話の聴講で「過去」を学び、参加国の現状報告や核兵器の講義などを通して「現在」について考え、グループワークで「未来」について意見を交わしました。参加した子どもたちにとって、この会議がスタートラインとなることで、世界中に長崎の平和の願いが伝わります。



～ 歴代平和大使名簿 ～

年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十年度(二〇〇八年)	1	熊川 実旺 (第四中 2年)
	2	別宮 賢治 (第五中 2年)
	3	渡邊 ちさと (六実中 3年)
	4	片野 結依 (小金南中 1年)
	5	清水 のどか (古ヶ崎中 1年)
	6	藤井 彩乃 (新松戸南中 2年)
	7	清水 健人 (金ヶ作中 1年)
	8	神部 莉奈 (新松戸北中 2年)
	9	山本 拓実 (旭町中 3年)
	10	黒木 若葉 (聖徳大学附属中 1年)
平成二十一年度(二〇〇九年)	1	川本 景介 (第一中 1年)
	2	鈴木 亜加里 (第二中 1年)
	3	小幡 祐太 (第三中 1年)
	4	山田 政明 (第四中 1年)
	5	清水 彬奈 (第五中 1年)
	6	久佐野 美奈子 (第六中 1年)
	7	増野 友梨奈 (小金中 2年)
	8	井山 陽菜 (常盤平中 2年)
	9	小林 美幸 (栗ヶ沢中 1年)
	10	熊川 大揮 (六実中 1年)
	11	高島 里夏 (牧野原中 3年)
	12	西 志穂 (河原塚中 3年)
	13	工藤 颯人 (根木内中 1年)
	14	四家 明宜 (金ヶ作中 1年)
	15	児島 一華 (和名ヶ谷中 1年)

年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十二年度(二〇一〇年)	1	櫻井 和奏 (第一中 2年)
	2	吉田 彩乃 (第二中 1年)
	3	三橋 若奈 (第三中 1年)
	4	笹本 幸輝 (第四中 2年)
	5	比嘉 祐哉 (第五中 2年)
	6	後藤 奈穂美 (第六中 1年)
	7	神部 ちひろ (小金中 2年)
	8	田中 萌加 (常盤平中 1年)
	9	高梨 望 (栗ヶ沢中 2年)
	10	岸田 穰士 (六実中 2年)
	11	大山 祭 (小金南中 1年)
	12	渡邊 誠嗣 (古ヶ崎中 2年)
	13	梶浦 美樹 (牧野原中 2年)
	14	斉藤 温人 (根木内中 1年)
	15	富永 由也 (河原塚中 1年)
	16	石井 拓海 (新松戸南中 2年)
	17	中川 剛志 (金ヶ作中 1年)
	18	向田 美紀子 (和名ヶ谷中 3年)
	19	山本 ありさ (旭町中 2年)
	20	新倉 花菜 (小金北中 1年)
	21	田村 陽香 (聖徳大学附属女子中 2年)
	22	染谷 日向子 (専修大学松戸中 1年)



年度	No.	氏名 (学校名)
平成三十三年 度(二〇二一年)	1	佐藤 萌加 (第一中 2年)
	2	発地 空介 (第三中 1年)
	3	岸 健太 (第四中 1年)
	4	宗像 未来 (第五中 1年)
	5	天野 七海 (第六中 1年)
	6	紙崎 莉緒 (小金中 2年)
	7	井山 祥樹 (常盤平中 2年)
	8	加藤 円来 (栗ヶ沢中 1年)
	9	鈴木 理花子 (六実中 3年)
	10	坂本 実優 (小金南中 1年)
	11	谷口 茉奈美 (古ヶ崎中 1年)
	12	對馬 あい子 (牧野原中 2年)
	13	山田 真平 (河原塚中 2年)
	14	新垣 峻太 (新松戸南中 3年)
	15	水谷 春来 (金ヶ作中 2年)
	16	長谷川 結友 (旭町中 3年)
	17	板倉 日向子 (小金北中 1年)
	18	張 敏 (聖徳大学附属女子中 2年)
	19	平野 瑞帆 (専修大学松戸中 2年)

年度	No.	氏名 (学校名)
平成三十四年 度(二〇二二年)	1	阿部 秀大 (第一中 2年)
	2	茂出来 美樹 (第二中 3年)
	3	小澤 美羅 (第三中 3年)
	4	笠原 卓斗 (第四中 1年)
	5	播磨 渚生 (第五中 3年)
	6	内海 渚 (第六中 1年)
	7	大津 みちる (小金中 3年)
	8	小俣 さやか (常盤平中 1年)
	9	佐藤 優海香 (常盤平中 1年)
	10	阿部 裕美 (六実中 1年)
	11	宮本 龍一 (小金南中 3年)
	12	樋口 杏 (古ヶ崎中 1年)
	13	高橋 あみ (牧野原中 2年)
	14	遠藤 未羽 (根木内中 2年)
	15	後藤 陽 (河原塚中 1年)
	16	鈴木 里歩 (新松戸南中 2年)
	17	岩崎 いぶき (和名ヶ谷中 1年)
	18	伊藤 梢 (和名ヶ谷中 3年)
	19	紀藤 颯斗 (旭町中 1年)
	20	川村 香奈美 (小金北中 1年)
	21	石井 そら (聖徳大学附属女子中 2年)
	22	中山 皓一郎 (専修大学松戸中 1年)



年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十五年 度(二〇一三年)	1	藍原 由梨奈 (第一中 1年)
	2	河野 圭吾 (第二中 1年)
	3	福田 友郁 (第三中 2年)
	4	旗谷 幸亮 (第四中 1年)
	5	宮島 健吾 (第五中 3年)
	6	後藤 美菜 (第六中 3年)
	7	関川 美海 (小金中 2年)
	8	金澤 春樹 (小金中 1年)
	9	阿部 雅治 (常盤平中 3年)
	10	中澤 有稀 (栗ヶ沢中 2年)
	11	加藤 一紗 (六実中 1年)
	12	島田 悠 (小金南中 1年)
	13	大久保 愛深 (古ヶ崎中 1年)
	14	緑間 喜子 (古ヶ崎中 1年)
	15	毎熊 和正 (牧野原中 2年)
	16	猪瀬 柊斗 (牧野原中 1年)
	17	奥野 智朗 (河原塚中 3年)
	18	平野 茜 (新松戸南中 1年)
	19	下藤 誉司 (和名ヶ谷中 1年)
	20	新倉 拓真 (小金北中 1年)
	21	郡司 萌 (聖徳大学附属女子中 2年)
	22	星 さりあ (専修大学松戸中 1年)

年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十六年 度(二〇一四年)	1	布川 恭大 (第一中 2年)
	2	白井 悠生 (第二中 2年)
	3	松本 優樹 (第二中 2年)
	4	本間 宏明 (第三中 2年)
	5	旗谷 吏紗 (第四中 3年)
	6	宮島 加奈子 (第五中 1年)
	7	植田 聖杜 (第六中 2年)
	8	合田 健太郎 (小金中 2年)
	9	早崎 諒 (常盤平中 2年)
	10	小井土 瑠苒子 (栗ヶ沢中 1年)
	11	望月 優衣 (六実中 3年)
	12	片野 玲奈 (小金南中 1年)
	13	和田 晴人 (古ヶ崎中 2年)
	14	對馬 悠介 (牧野原中 2年)
	15	井手 麟太郎 (根木内中 2年)
	16	樋口 明日香 (河原塚中 1年)
	17	斎藤 龍秀 (新松戸南中 1年)
	18	久保田 美咲 (和名ヶ谷中 2年)
	19	紀藤 菜桜 (旭町中 1年)
	20	渡邊 龍 (小金北中 1年)
	21	野中 利悦 (聖徳大学附属女子中 2年)
	22	築田 真理子 (専修大学松戸中 3年)





平成27年度
平和大使長崎派遣事業報告書
～守り続けよう 平和な未来
伝えていこう 過去の悲しみ～

松戸市
総務部総務課

平成27年12月発行